## 昨年度の総会報告

平成二十二年度の総会は、昨年八月七日（土）午後五時より、一宮スポーツ文化センターで行われました。

五回生・二十五回生を中心として、総勢百二十一名の方々に参加していただきました。一昨年の学年同窓会は二十四回生のみの開催でしたが、昨年は二学年で開催することができました。そして、ここ数年の中では最も多くの方に参加していただくことができました。ご多忙にもかかわらず、歴代の校長先生をはじめ、懐かしい旧正副担任の先生方、現職員の先生方にもご出席いただきました。

総会では、平成二十一年度の事業報告・会計報告、役員改選、平成二十二年度の事業計画・予算案の審議と、滞りなく議事を進めることができました。総会でもご報告させていただいたように、同窓会費及び同窓会報郵送料カンパでは多くの方にご協力いただき、重ねてお礼申し上げます。

懇親会は、学年同窓会を担当した五回生・二十五回生に新会員の四十四回生を加え、若々しい雰囲気の中で盛り上がりました。各テーブルでは、昔話に花が咲き、時が経つのも忘れて旧交を温めることができました。懇親会を締めくくる校歌斉唱も恒例になり、名残りが尽きないままお開きとなりました。

本年は六回生と二十六回生の学年同窓会を開催させていただきます。昨年同様、多数の方が参加していただければと考えております。なお、担当学年にかかわらず、クラス会や部活動のOB会の場としても同窓会総会を大いに活用していただけたら幸いです。

今年度の総会に、是非皆様お誘い合わせの上、気軽に参加していただきますようお願い申し上げます。

## 東京支部会の報告

37回生 古川 直樹（2003年卒）

2010年度の一宮西高校同窓会東京支部会は、11月27日（土）に東京は新宿にて開かれました。初冬の肌寒さが増す中、総勢約25名の関東在住の卒業生の方々にご出席いただき、大盛況のうちに幕を閉じました。

一次会は、新宿東口の居酒屋の一室にて行いました。引き続き場所を移動しての二次会には、途中参加の方々も加わり、カジュアルな雰囲気の中、旧友や新たに知り合った同窓生との交流を温めました。

今回は、同窓会役員会から、会長の山内様、監査の大津様のお二方に、はるばる東京までお越しいただきました。現在の西高や一宮の町の様子についてもご報告をいただき、参加者一同、懐かしいお話に耳を傾けました。

東京同窓会

本同窓会は、毎年参加していただいている常連の方々のお顔もあれば、今回初めて参加していただいた方、また、久しぶりに顔を出していただいた方と、世代を超えて、いつでも気兼ねなく参加できる会です。私自身も、自分と同じように東京で頑張っていらっしゃる先輩や後輩の近況を伺うことで励まされ、たくさんのエネルギーをもらっています。このような良い伝統を、毎年絶やさずに続けていきたいと思っています。

今年度も、11月下旬の開催を予定しております。非常にオープンな会ですので、関東圏在住、または、東京に立ち寄られる機会のある卒業生の皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

## 西高での30年間の感謝を込めて

岩田 幸雄

私は平成22年度を最後に37年間の教員生活を終えることになりました。一宮西高校には昭和52年からの25年間と平成18年からの5年間の都合30年間勤務させていただき、わが身の幸運を今改めてかみしめているところです。

この30年間を振り返ってみると、私にとって西高は3つの時代に分けることができます。はじめは学校群の時代です。高校入試の合格発表当日、西高に振り分けられて涙を流す中学生を目の当たりにして、3年後には「西高でよかった」と思えるようにしてやろうと心に誓いました。しかし思ったように進学実績が上がらず、生徒たちに申し訳なく、担任としてつらく苦しい日々でした。

次は、学校群の終わり頃から複合選抜初期にかけての時代です。伝統校復活のために学校群制度が廃止されることになり、かつて伝統校の分校であった西高は、学校の生き残りをかけて果敢に改革に取り組みました。複合選抜1回生の学年主任として重責を担うことになりましたが、素直で真面目な生徒と献身的な先生方と一緒に西高を築いていくというやりがいのある毎日でした。当時は司馬遼太郎を愛読しました。

3つめは複合選抜制度の中で分掌主任・教頭として西高の位置を確立するために努力した時代です。学校の独自性を描き、地域の理解と信頼を得て、説明責任を果たさなければなりません。学校全体に西高を大切にしたいという思いが満ちていました。こうした熱気の中で学校週5日制の完全実施に伴い47分7限授業という当時としては画期的な授業形態を導入することができました。この生徒にも教員にも負担の多い体制の中にありながら、さらに補習・休日の学習教室をはじめ様々な指導を実施していく中で、以前にも増して多くの卒業生が志望校に進学できるようになりました。

ところで、西高が進学校として生き残るために生徒と教師が協力して果敢に挑戦し忍耐強く努力を続けてこられた根底には、西高では学習を第一としながらも部活動や生徒会行事を大切にしているという誇りがあり、そうした西高であり続けるためには努力を惜しまないという覚悟があったのだと思います。実際、今年の卒業式の答辞の中では、時に対立する学習・部活・行事をより高いレベルで成し遂げるなかで人間的にさらに高い次元へと到達していくことこそが西高生の自己同一性であり、そのことのためには労をいとわぬ姿勢が西高生の誇りであると明確に語られ、多くの参列者が感銘を受けました。

最後に西高の未来について述べたいと思います。去る者にその資格はないのですが、期待を寄せるということでお赦しください。今、西高には新しい学習指導要領に対応した体制作りが求められています。実はここ数年の間に私立高校も含めれば7限授業は特別のものではなくなっています。もはや現体制では優位に立つことはできなくなっているようです。もう一段高くジャンプしなければなりません。これは大変なことです。しかし、西高には2つの大きな財産があります。ひとつは、これまで西高は絶えず変化することで、新しい時代の要請に応えるとともに、いつの時代にも変わることのない普遍的価値をもつものを守ってきたという事実です。変わることは西高のお家芸です。もうひとつは、西高では互いに対立する価値観をともに追求しつつ、その相克の中からこそより強固で洗練された体制が築き上げられるという信念です。立ちはだかる変化の要請をむしろ好機として素晴らしい飛躍を期待します。

終わりにあたり、ともに学んだ卒業生の皆様、ご指導いただいた諸先輩方、一緒に勤務させていただいた同僚の先生方に対して、心よりお礼申し上げます。30年間大変お世話になりありがとうございました。

## 離任式の挨拶

北川 潤子

私は、西高に8年間お世話にな